

# 心の発生と進化

デイヴィッド・プレマック、アン・プレマック著

人間は、誰しも心をもつ。自分とは、何だろう。心は、どこから来たのだろう。人間にとつて原初的なこんな課題に真正面から取り組んだのが、本書である。著者らが進めてきた研究の総まとめとして、模倣、教育、言語、信念など、心についての基本的な課題を、ひとつひとつ解説していく。何気ない文にも、多くの研究者との議論の結果が凝集され、深い意味が隠されている。それだけに、読むのには、それなりの構えが必要だ。

書名に進化を標榜しているが、本書に進化学的な見方はない。それを期待した人は、進化の記載に初歩的な間違いが目につき、気勢をそがれるかもしれない。しかし、著者が目指すのは、原著の副題にある「われわれが何者であるかの秘密を解く」ことである。本書に出てくるチンパンジーなどの動物は、系統進化的な分析の対象では

なく、人間の心の特徴を映し出す鏡なのである。本書の随所に、著者が「プラスチック言語」の研究に使ったチンパンジーのサラの名が出てくる。サラが、ともに心を考える共同研究者とでも言える存在だったことがうかがえておもしろい。

心理学は、用語を厳密に定義し、いわば独自の言語体系をつくる。本書は、わかりやすく配慮はされているものの、ある程度の心理学の素養がないと、読み進めるのがつらい。しかし、著者らが、自身の心の動きを解析して発想を得ていると思える箇所が随所にあり、研究の進め方がかいま見えて興味深い。ここは、大御所である著者の、後進に対するメッセージなのだろう。

言語が、コミュニケーションにも思考にもきわめて重要だということは、だれにでもすぐわかることだ。しかし言語は複雑で、その研究は、一筋縄ではなかつた。本書を読むと、解説への道は遠いとはいって、言語についても格段に多くのことが見えてきたことがわかつて、うれしい。著者は、これまでの研究成果を生かすべく、具体的な教育法を提言する。その理論を、実践的に人間関係の諸問題の解決に役立てようとする著者の意気込みは、評価されるべきだつう。

(長谷川寿一監修、鈴木光太郎訳、新曜社・四、二〇〇円)  
▼デイヴィッド氏は25年生まれ。ベンシルベニア大名誉教授。夫人のアン氏とチンパンジーの言語学習実験を行う。



## 「人間とは何者か」解明に挑む

2005年6月26日 日本経済新聞